

建築・デザイン領域から、問いと実践を往復する
「クリエイティブ・アントレプレナー」を育む。



未来を 創る 研究室

総研
Presents
番外編2

建設業の次世代を担う
大学研究室訪問

建設物価調査会の総合研究所では、次世代を担う若者の育成・支援や様々な研究を通して建設事業の健全な発展と活性化に寄与する研究支援プロジェクトを行っています。その一環として、広く建設に関係する研究室を紹介します。

一般社団法人

ASIBA



2023年10月 インキュベーション1期を開催
2024年1月 一般社団法人ASIBAとして法人化
2024年4月 インキュベーション2期を開催
2024年10月 東京都スタートアップ支援事業「TOKYO SUTEAM」に採択
2025年2月 ASIBA Creative Challenge 1期 開催
2025年4月 インキュベーション3期を開催

代表理事 二瓶雄太

東京大学大学院博士課程在学。建築の解体を専門とする。理論構築・歴史研究と並行して、解体材の再利用や解体予定の建物の葬送などに取り組み、研究と実践の往復を心掛けている。

2022年度 総務省 異能vation 採択
2022年度 東京大学 伊東忠太賞
2023年 日本建築学会 優秀卒業論文賞



Towards Creative Entrepreneurship,



- 1 | クリエイティビティ（創造性・独創性）とアントレナリーシップ（起業家精神）の両立を目指して
- 2 | 小川町での地方課題探索フィールドワークプログラム
- 3 | 既存のコンペに問いを投げかける、審査ではなく挑戦のためのアワード
- 4 | ASIBA FESでのインキュベーション2期生によるファイナルピッチ

建築・デザイン領域の学生の
可能性を信じ、アイデアの
社会実装までを伴走支援する。

ASIBA「Architecture Studio for Impact Based Action」は一般社団法人として、2024年1月に設立された。建築を志す学生が、卒業設計や自主制作などの独創性溢れるアイデアが社会実装されないことへの違和感を抱き、自前でのインキュベーション・プログラムやワークショップの企画運営を始め、それらの実践経験を糧として産官学を含む多数のパートナー企業と連携し、2024年10月には東京都のスタートアップ創出に向けた協定事業「TOKYO SUTEAM」に採択されるなどを経た。この頃から徐々に学生団体としてのASIBAから脱皮し、事業主体として産業や経済社会に対して建築・都市・デザインの領域から持続的にインパクトを生み出していくことを目指す組織となった。

ASIBAはただ単に「数年後に大きく事業成長するスタートアップを生み出したい」とは考えていないと代表は語る。不確定で複雑な問題や、あるべき社会の姿を希求するために必要なのは、目の前のマーケットにフィットするスタートアップやビジネスソリューションに限らないと考えているからだ。特に、クリエイティブ領域の若手の実践から生まれた視座や知見は長期的な強度のある「社会洞察」であり、「イノベーションの種」や「発明」になる可能性を持っていると言う。既存の産業構造や文化構造を更新していくためには、理論の前に私たちの「好奇心」や「観察から生まれた気づき」から始まる、実践的活動と学びの繰り返しが必要であることを強く語った。そのようなASIBAの理念に共感し、自社のみでなく領域全体の可能性を広げる意志をもって協働してくださるASIBAパートナーとともに、今の文化的な伝統を引き継ぎながらも、革新を起こそうとしている若者達の姿勢を応援し、建築、デザイン、アートの文化圏に革新性をもたらす持続的なうねりをASIBAは育んでいきたいと語った。

学生主体のプロジェクト

ASIBA Creative Incubation Program Creative Action with Passion.

ASIBAでは、ひとりひとりの若者がもつ情熱やこだわりから始まる「主体的な問いと実践の往復」こそが、建築・デザイン・アートの領域から生まれる新たな文化や事業に必要な不可欠なプロセスであると信じている。ASIBAのインキュベーションプログラムは、その純粋な問いを社会に対して形にするために「必要な知識」や「共創するコミュニティ」、「伴走するメンター」などを提供するという。3ヶ月間のプログラムを通して、ともに悩み、考え、喜び、悲しみ、感動し、あなたがあなたらしいと思う風景をつくり上げるまで、真正面から向き合っ



※インキュベーション
起業家やスタートアップ企業を支援し、事業の成長を促す活動

二畳建築

小さな空間から 実践や出会いの場を生み出す

二畳建築は、はじめの一步として、まちなかを活用し、誰でも気軽にチャレンジできる機会を提供するため、軽トラックの荷台をカスタムした空間の貸し出しをしています。

建築アイデアが実現せず、模型やプレゼンで終わってしまうもどかしさを感じていた中、ASIBAインキュベーション1期では実際に設計を形することでコミュニティの実感が得られました。昨年12月には池袋リビンググループとのコラボイベントとして、池袋のまちなかに、小さなシャボン玉屋さんを開く「シャボン玉KIOSK」を開催し、通行人が気軽に集える新しい空間を創出。さらに、茶室空間プロジェクトでは、茶人のお点前を通じて子どもから高齢の方、外国人との交流が実現しました。今後は、小さな空間を活用し、日常の中で人と人が出会う場を増やすとともに、二畳建築をアップデートして多彩な使い方を提案していく方針です。



半田地寛 | CHIHIRO HANDA
東洋大学大学院ライフデザイン学部
人間環境デザイン学専攻 修士2年



ReLink 建物をほどくことから 始めるデザイン

ReLinkは、リユースによって建築部材を新たな価値に繋げるサプライチェーン・バリューチェーンの仕組みを生み出し、モノを大切に使い続けていく社会をつくることを目指しています。

中古建材販売店が全国に60社以上存在するにもかかわらず、多くの設計者にその存在が知られていなかった現状から、ReLinkは販売者と設計者をつなぐ検索ツールとして始まりました。当初はウェブ上の中古・余剰建材情報を一元化しリユース促進を目指していましたが、現場でのヒアリングを経て、リユース材の実用例を示し信頼を得る必要性に気づき、メディア発信やデザイン実証、具体事例のリサーチなど活動範囲を拡大。デザイナーとの連携を活かし、建物を資材貯蔵庫と捉えながら、資源の有効活用と新たな価値創造を目指しています。



本多栄亮 | EISUKE HONDA
明治大学理工学部建築学科助手

>> ReLinkの考える未来像 ー変化に対応した未来像ー



資材貯蔵庫としてのたてもの



Enoniwa

絵を通じてコミュニケーションの 可能性を広げる

Enoniwaは、「絵を描くことを対話の道具として扱い、フラットな関係を築くための場を育てる」というコンセプトのもと、お絵描きアプリの開発、ワークショップデザイン、体験型展示企画などを展開し、絵を通じたコミュニケーションで、障害の有無にかかわらず「一緒に絵を描く友達」として交流することを目指しています。



北林菜 | SHIORI KITABAYASHI
東京理科大学創域理工学研究科
建築学専攻修士2年（当時）



私とダウン症の弟との共同の絵描き体験から、言葉を経ずに心が通じ合う喜びを感じ、誰もが気軽に取り組める「絵描き」を対話の手段として活用し、閉鎖的になりがちな知的障害者の生活環境に新たな交流の場を提供しようというプロジェクトの発端となりました。絵を描く過程（筆跡）に着目し、絵に時間軸を持たせ、描かれているような感覚が生まれ、相手の線に反応することで、非言語的なコミュニケーションの可能性を探っています。今後も、ハードとソフトの両方のアプローチで障害者と社会の関わり方のデザインに挑戦していこうと思います。